

副詞節の修飾構造について

古 賀 恵 介*

1. 副詞節の従属度の階層

副詞の意味と統語的修飾先が階層構造を形成していることは、以前から多くの論者が指摘するところであった。もはや古典的な副詞分類とも言える Greenbaum (1969) の adjunct, disjunct, conjunct 等の分類は、多様な副詞の意味的・統語的特徴を実証的に捉えたものであったし、生成統語論の中では Jackendoff (1972), Nakajima (1982), Ernst (1998), Cinque (1999) などが、その時々 of 理論的枠組の中で副詞の意味・統語の階層的対応関係を扱っている。また、意味的に独自の立場から論究したものに澤田 (1993) などがある。筆者も、古賀 (2009) で、三層構造仮説を組み込んだ認知文法の枠組 (古賀 (2004; 2005)) にもとづいて、副詞の意味と修飾のあり方の階層性について考察した。そこで、本稿では、副詞の修飾構造の分析の延長として、定形節の形をとった副詞節の修飾構造を取り上げてみたいと思う。

副詞節の修飾構造については、副詞の場合ほど研究は多くないが、基本的に単独副詞や前置詞句のようなものと同様の階層的性質が見られるものと考えられてきている。例えば、Nakajima (1982) は、Jackendoff (1977) の X-bar 理論の中で提案された V^3 システムに対して、副詞の修飾先の階層性の分析をもとに V^4 システム (動詞の投射を $V^1 \sim V^4$ の 4 階層とするもの) を提案し、

* 福岡大学人文学部准教授

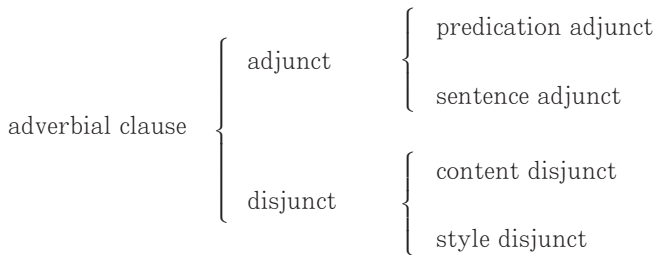
その各階層を修飾する副詞節のグループを、その統語的振舞い（do so 代用、分裂文の焦点、否定の作用域、主語の省略、前置可能性）から以下のような 4 種類に分類している。

- (A) Group IV (V^4 に接続) : because (nonrestrictive), although, for, so that (result). etc.
- (B) Group III (V^3 に接続) : while (contrast), whereas, though, if, unless, since (reason), etc.
- (C) Group II (V^2 に接続) : because, when, after, before, while (duration), since (time), so that (purpose), etc.
- (D) Group I (V^1 に接続) : as if

Group I から上に行くほど、V の投射のより上位の位置に接続するというシステムである。この階層分類は、前置可能であるはずの although が Group IV に入っていたり、Group III に属するはずの if が Group II の特性を一部持っていたりする点（第 6 節で詳論する）が取り上げられていないなど、句分けのしかたそのものに細かい問題はあるのだが、副詞節の接続のあり方の全体的階層性を、統語的な振舞いの実証的分析をもとに理論的に整理・分類した先駆的研究として大きな意義があると言える。

Nakajima (1982) と細部においては異なるが、同様に副詞節の階層的分類を提案したものに Quirk *et al.* (1985) がある。Quirk *et al.* (1985: 1068-1077) は、Greenbaum (1969) で副詞分類のために提案された付加部 (adjunct)、離接部 (disjunct) などの概念を援用しながら、副詞節の修飾構造の階層的分類を提案しているのである。具体的には、副詞節をまず付加部と離接部に分け、更に前者を叙述付加部 (predication adjunct) と文付加部 (sentence adjunct) に、後者を内容離接部 (content disjunct) とスタイル離接部 (style disjunct) に下位分類するというものである。¹

¹ 厳密に言うと、Quirk *et al.* (1985: 1068-1069) は、この他に、合接部 (conjunct) と



(1) 叙述付加部 (predication adjunct)

a. Your coat is *where you left it*.b. my grandparents lived *before television was invented*.(Quirk *et al.* (1982: 1074))

(2) 文付加部 (sentence adjunct)

a. *When he saw us*, he smiled.b. *Because it is near Madrid*, tourists come for the day.(Quirk *et al.* (1982: 1075))

(3) 内容離接部 (content disjunct)

a. He brought me a cup of coffee *although I asked for tea*.b. William has poor eyesight, *whereas Sharon has poor hearing*.(Quirk *et al.* (1982: 1071))

(4) スタイル離接部 (style disjunct)

a. What does the word mean, *since you're so clever?*(Quirk *et al.* (1982: 1072))

下接部 (subjunct) という以下のような分類も立てているのだが、

(i) *What is more*, he spent the rest of his money on gambling. (合接部)(ii) *As far as the economy is concerned*, the next sixth months are critical.

(下接部)

これらは、スタイル離接部と共に、本稿で提案する態度副詞節に含めてよいのではないかと考えられるので、ここでは議論を省略する。

b. I'm in charge here, *in case you don't know*.

(Quirk *et al.* (1982: 1073))

Quirk *et al.* (1985) は特定の言語理論に立脚しているわけではなく、どちらかと言えば、言語直観に即したインフォーマルな伝統文法的手法の分類を行なっているのであるが、それゆえにまた、事柄の本質を分かりやすい形で捉えているところがある。すなわち

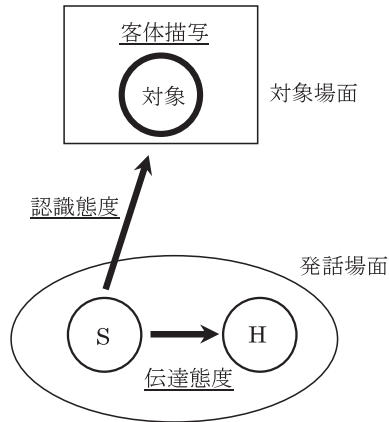
Adjuncts and disjuncts tend to differ semantically in that adjuncts denote circumstances of the situation in the matrix clause, whereas disjuncts comment on the style or form of what is said in the matrix clause (style disjuncts) or on its content (content or attitudinal disjuncts). (Quirk *et al.* (1982: 1070))

と述べていることからわかるように、付加部は主節の事態の周辺的情報（つまり“内側”の情報）を表す要素であるのに対して、離接部は主節の“外側”からつけられた話者のコメントのようなものである、という正しい言語直観を捉えているのである。ただ、直観的な分析のままでは、そもそも何故そのような区別が副詞節に起こってくるのか、という疑問に答えることができない。それに答えるには、より包括的な文法理論の一部として副詞節のあり方を説明していく必要があるのである。従って、問題は、副詞節の分類に、理論的な記述をどのような形で与えるべきか、ということである。本稿では、認知文法理論の立場からそのような理論的記述を行なって見たいと思う。

2. 意味の三層構造と節構成の三層構造

筆者は、古賀 (2004) において、Langacker の認知文法理論への修正仮説として意味の三層構造仮説を提案した。それは、語から文に至るまでの言語表現のすべての単位は、その概念構造が、客体描写・認識態度・伝達態度（このうち後の二者は主観性領域）の三層の基本的認知領域（basic cognitive

domains) で構成され、そのいずれかの領域にプロファイル（言語が直接に表す部分）が含まれる、というものである。



そして、文（または節）の意味にも同様の三層構造があるものと考え、それを特に事態描写・事態認識・発話態度と名付け、古賀（2005）では、《文》という言語単位に関して、話し手の発話態度をプロファイルする表現単位である、という提案を行なった。その詳細はここでは省略するが、本稿の分析においても有効なものであると考えている。

三層構造仮説の中でも本稿にとって特に重要なのは、文の意味の主観性領域（事態認識と発話態度）である。これは、通常の意味論では、モダリティ（modality）や発話行為（speech-act）として、文の命題内容（proposition）と区別して捉えられている意味領域である。一般的な意味論でも、何らかの命題内容に、話し手の主観的態度であるモダリティや発話行為が付け加えられて、文の意味が階層的にでき上がるという考え方が取られており、筆者も、この過程を三層構造仮説の考え方に従って、文の客体的内容である事態描写に、話し手の主観である事態認識と発話態度が結びつくことによって文の意味が完成す

る、と考えている。これは、すべての種類の言語単位が意味の三層構造（客体描写・認識態度・伝達態度）を持つという、筆者の基本的な考え方から必然的に導き出されてくる結論でもある。²

今回問題になる文の意味の三層構造に関しては、事態描写・事態認識・発話態度がそれぞれどのような中身で構成されているかが重要になってくる。本稿では、以下のような構成を前提にしている。

- (A) 事態描写： 述語・補部・修飾部
- (B) 事態認識： 中核事態確定・時制・法性
- (C) 発話態度： 主張・発問・要請 etc.

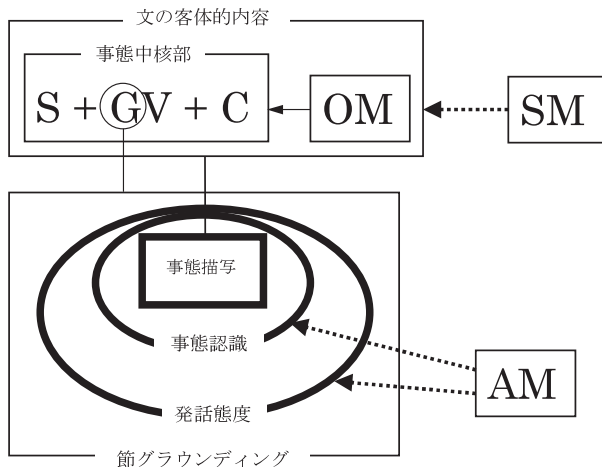
文の意味の主観性領域（＝Langacker の言う Grounding）を事態認識と発話態度の二層に分け、更にその中に個々の意味領域を設定することにより、その各部分を修飾する副詞的要素のあり方を明示的に捉える事ができるのである。筆者は、古賀（2009）において、単独副詞の代表的なものを、その修飾構造から分類し、特に、一般的な文法書で「文を修飾する副詞」と言われている文副詞が、実は主観性領域の一部を修飾する語であること、またそれ故に、文全体を修飾するよう見えながらも、文の中でグラウンディングが明示される部分（定形動詞・助動詞）に隣接する形で現れることができる（つまり、図像性 iconicity の原理に従っている： Taylor（2002: 46-48））ということを明らかにした。このように、文の意味の主観性領域を階層構造として捉える考え方は、副詞（的要素）の修飾構造を解明する上で大きな有効性を持つものである。このことは、後節において、主観性領域を修飾する副詞節（Quirk *et al.*（1985）

² 従来からの認知文法の流れでは、Grounding は単一的な操作として扱われてきたが、Langacker（2009: Ch. 8）では、Grounding に関して、Basic Grounding（tense + modality）と Interactive Grounding（polarity + illocutionary force）を区別する2段階構成が提案されている。細部の違いはあるが、文で表される事態そのもの主観的位置づけ（＝事態認識）と、聞き手に対してそれをどう提示するかという認識（＝発話態度）を理論的に区別することの必然性が、Langacker においてもようやく承認されたということである。

の言う style disjunct) を取り上げる際に明らかになるであろう。

3. 修飾構造から見た副詞節の分類

第1節でもみたように、副詞的要素 (adverbial) は、その修飾の構造から大きく4つに分けることができる。1つは主節述語の補部をなすもの。2つ目は、主節の事態描写の一部 (周辺的情報) を具現化する客体的修飾部 (Objective Modifier: OM) をなすもの。3つ目は、主節の事態描写に別の事態表現を主観的に結びつける主観的修飾部 (Subjective Modifier: SM)。4つ目は主節のグラウンディング部 (主観性領域) そのものを修飾する態度修飾部 (Attitude Modifier: AM) である。この4つの違いを図式化すると、およそ下図のようになるであろう。



図中で、S + GV + C は「主語 + 定形動詞 + 補部」のことで、GVとはグラウンディング要素を含んだ動詞ということである。(従って定形助動詞を含む。) このまとめりが、節として事態描写情報を具現化する最小単位となるの

で、これを事態中核部と呼んでおく。そして、それに客体的修飾部 (OM) が付加されたまとまりを文の客体的内容と呼んでおく。Quirk *et al.* (1985) の分類との対応関係は以下の通りである。

- (A) Predication Adjunct ==> 補部副詞節
- (B) Sentence Adjunct ==> 客体的副詞節
- (C) Content Disjunct ==> 主観的副詞節
- (D) Style Disjunct ==> 態度副詞節

Nakajima (1982) にしろ、Quirk *et al.* (1985) にしろ、副詞節分類の句分けははっきりとした境界線を持つことが暗黙の前提になっているようであるが、本稿では、そのような分類の考え方は妥当ではないと考える。なぜなら、例えば補部と修飾部 (項と付加部) の区分が絶対的なものでないことは Langacker (1991; 2008) の主張するところであるし、また、第6節での考察で明らかになるように、客体的修飾部と主観的修飾部の両方のカテゴリーに跨るような性質を持った副詞節も存在するからである。以上のことを念頭に置いた上で、以下、副詞節の各カテゴリーを一つずつ取り上げて考察してみよう。

4. 述語補部 C をなす副詞節

補部副詞節は生成統語論で言うところの項 (argument) をなしている副詞節のことであり、認知文法的に言うならば、述語のプロファイルをなす関係概念の中の空白部 (elaboration site: e-site) を具現化し意味を補完する要素ということである。具体的には、動作の時間・場所・様態の明示を必要とする動詞の補部を副詞節で表している場合がこれにあたる。

- (5) a. The water will last *until you return*.
- b. My grandparents lived *before television was invented*.
- d. You may live *wherever you like*.
- e. I put it *where I found it*.

- g. He wanted the money *where it would earn the highest interest rates*.
- c. He looks *as if he's tired*.
- f. He treated them *as if they were young children*.

((a)-(g), Quirk *et al.* (1982: 1074))

補部副詞節は、述語と緊密に結びついているため、通常、(6b)にあるように、文頭への前置がしにくく、また統語論で言うところの do so テストでも、(7a)にあるように do so の外に出すことができない。

- (6) a. John behaved as if he were a beggar.
 b. ??As if he were a beggar, John behaved.
- (7) a. *John treated us as if we were beggars, but Mary did so as if we were aristocrats.
 b. John came here before I arrived, but Mary did so after I arrived.

((7), Nakajima (1982: 360))

前置については第8節に譲るが、do so テストに関して言えば、do so による代用をするためには、事態の個別例 (instance) の叙述を行なう表現単位として、述語の意味の具現化の完結性（その最小単位が事態中核部）が要求されるということであろう。つまり、述語の補部がすべて具現化された段階で初めて個別例を叙述するものとして認められ、また代用の対象となり得るということであろうと思われる。ただ、この点については、代用表現一般という観点からの詳細な考察が必要なので、本稿ではこれ以上の言及は行なわない。

5. 客体的修飾部 OM をなす副詞節

客体的修飾部は、事態描写の周辺的情報（時間・場所・様態・原因・目的）を具現化する修飾部であり、客体的副詞節はそれが定形従属節の形で表現されたものである。これと、前節で取り上げた補部副詞節との違いは、統語論で言

うところの項と付加部の違いに対応するものである。

- (8) a. TIME: when, before, after, while, as, since, till/until, etc.
- b. PLACE: where
- c. MANNER: as, as if/though, the way, like³
- d. PURPOSE: so (that), in order that
- e. CAUSE: because

客体的修飾部は、客体的内容の一部ではあるが、周辺的情報を表し、述語との結びつきが補部の場合ほど緊密ではないため、以下のbの例にあるように、容易に前置することができる。

- (9) a. He finished his homework while I was watching TV.
- b. While I was watching TV, he finished his homework.
- (10) a. We saw nothing but blackened ruins where the fire had been.
- b. Where the fire had been, we saw nothing but blackened ruins.
- ((b), Quirk *et al.* (1982: 1087))
- (11) a. They walked around and tried to pick any food they could as if they were beggars.
- b. As if they were beggars, they walked around and tried to pick any food they could.
- (12) a. They started early in the morning so that they could arrive there before the sun set.
- b. So that they could arrive there before the sun set, they started early in the morning.
- (13) a. He was allowed to park his car there because he had a special

³ 様態を表す修飾部は、補部ではないが、他の修飾部に比べて述語との意味的緊密性が強い（つまり事態のより内的な情報を表す）ためか、補部に近い振舞いを示す。ここでは、議論が煩雑になるため、様態修飾部（特に as）の考察は省略する。

permit.

- b. Because he had a special permit, he was allowed to park his car there.

また、客体的副詞節は、事態中核部と一緒にあって、節の意味の客体的内容の上限を形成する。言い換えれば、客体的修飾部までが、《1つの事態》の描写をまとめて行なうことができる最大範囲ということである。（このことの持つ意味合いは、次節の主観的副詞節との比較を通じて明らかになる。）

6. 主観的修飾部 SM をなす副詞節

副詞節のうち理由・条件・譲歩・対照などを表すものは、主観的修飾部をなす副詞節、すなわち主観的副詞節を構成している。

- (14) a. REASON: as, since, now that
 b. PURPOSE: lest
 c. CONDITION: unless, in case, once, so/as far as, as long as
 d. CONCESSIVE: though, although, whether, wh-ever, no matter wh-
 e. CONTRAST: when, while, whereas

主観的副詞節は、主節述語の表す事態に別の事態を（話し手の主観の働きにより）結びつけるものとして概念化されている副詞節である。つまり、客体的副詞節が主節の客体的内容の一部を具現化するものであるのに対して、主観的副詞節は、主節の表す客体的内容に“外側”から別の事態描写を結びつけるものとしてイメージされているのである。（第1節参照。）

このような主観的修飾部と客体的修飾部との違いが最も鮮明な形でわかるのは、副詞節部分が文の焦点になるか否か、ということを見てみた場合である。客体的接続詞 because と主観的接続詞 since（理由）の例で比べてみよう。（理由の as は since と同様の振舞いをするので、ここでは特に取り上げない。）

以下の例からわかるように、because 節は、様々な形で文の焦点になることができるが、理由の since はそれが一切できない。

(15) 分裂文

- a. It is because they are always helpful that he likes them.
- b. *It is since they are always helpful that he likes them.

(16) 疑似分裂文

- a. The reason he likes them is because they are always helpful.
- b. *The reason he likes them is since they are always helpful.

(17) 疑問の焦点

- a. Does he like them because they are always helpful or because they never complain?
- b. *Does he like them since they are always helpful or since they never complain?

(18) 否定の焦点 (文否定)

- a. He didn't like them because they are always helpful but because they never complain.
- b. *He didn't like them since they are always helpful but since they never complain.

(19) 否定の焦点 (構成素否定)

- a. He liked them, not because they are always helpful but because they never complain.
- b. *He liked them, not since they are always helpful but since they never complain.

(20) only による強調

- a. He likes them only because they are always helpful.
- b. *He likes them only since they are always helpful.

(21) only による否定倒置

- a. Only because they are always helpful does he like them.
- b. *Only since they are always helpful does he like them.

(22) why に対する応答

- a. Why does he like them? Because they are always helpful.
- b. *Why does he like them? Since they are always helpful.

((15)-(22), Quirk *et. al* (1985: 1071))

ここで、文焦点 (sentential focus) という概念について一言しておく必要がある。文の焦点というのは、話し手がある客体的内容を一つの文で表現する際に、聞き手に最も伝えたいと考えている情報を表す部分である。これは、同じ形式の文であっても、使用の文脈によって変わってくることもある。(以下の例では、下線部が文焦点になっている。)

- (23) a. "What happened?" "John got injured in a car accident."
- b. "What happened to John?" "He got injured in a car accident."
- c. "How did John get injured?" "He got injured in a car accident."
- (24) a. Did John get injured in a car accident?
- b. Did he get injured in a car accident?
- c. Did he get injured in a car accident?
- d. How did he get injured?
- (25) a. John didn't get injured in a car accident.
- b. He didn't get injured in a car accident.
- c. He didn't get injured in a car accident.

文焦点をどの部分に設定するかという認識は、文の事態描写 (客体的内容) からは独立している。つまり話し手の主観的認識であり、しかも、話し手が聞き手に文の内容をどのように提示したいかということに関わる認識である。従って、本稿では、文焦点を、文の発話態度を修飾する要素 (発話態度修飾表現)

の一種と考える。因みに、英語では、文焦点は文強勢のような音声的手段や、前置・倒置構文、分裂文など各種の特殊構文を用いて表される。⁴

文焦点の概念に関して注意しておかねばならないのは、文焦点が持つ情報伝達上の重要性 (communicative importance) は、文の構成的構造 (compositional structure = 統語構造) における概念的卓立性 (conceptual salience; i.e. profiling) とは相対的に独立している、ということである。実際、(23) の a ~ c では、文のプロファイルは文全体であるということで共通しているが、文焦点は異なっている。また、(23c)~(25c) の例では、いずれにおいても文構造の中でも最も概念的卓立性が低いはずの修飾部 *in a car accident* が、情報伝達上は最も重要な情報を担う要素として文焦点となっている。そもそも、文焦点は、談話の流れの中で新情報になっていることが多く、またそういう情報は事態描写の周辺部として概念化されることが極めて多い。従って、文全体のプロファイルと文焦点が異なることは非常に多いのである。

以上のような焦点化の理解を前提にした上で *because* と *since* の違いを見直してみるとどうなるだろうか？ 複文構造の場合、文の焦点は主節の客体的内容の全体または一部である。従って、(副詞節でありながらも) 主節の客体的内容の一部を構成している *because* 節が文焦点になれるのは当然のことと言える ((15a)~(22a))。これは、(26) の例でわかるように、目的の副詞節 (*so that, in order that*) でも同様である。(以下の例文での太字による強調は古賀。)

- (26) a. It was so that they might have arrived there before the sunset
that they left early. (Nakajima (1982: 361))

⁴ ただ、焦点を明示化する様々な構文には、焦点位置にどのような要素を許容するかという点に関して違いがある。例えば、分裂文の焦点になり得る典型的な文法カテゴリーは名詞句と前置詞句であり、それ以外の要素を焦点位置にした場合には容認性が下がったり、特殊なニュアンスの裏付けが必要であったりする。この点については、Emonds (1976)、天野 (1976)、安井 (1978) などの研究があるが、簡単には安藤 (2005: 773-774) にわかりやすいまとめがある。

- b. Take the case of a leading pharmaceutical company: Its managers recently asked employees to take pay cuts to help pay for the launch of an expensive new drug. And why should employees make that sacrifice? **Not so that** fellow employees might keep their jobs during lean times, **but so that** the company could still meet the earnings targets it had promised Wall Street.

(http://money.cnn.com/magazines/fortune/fortune_archive/2003/09/29/349894/index.htm)

- c. It is clear that you wanted those two young Somalians caught, **not in order that** they should be dealt with by process of law, **but so that** they could receive salutary summary justice then and there.

(http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/england/london/7777687.stm)

一方、理由の since 節は、主節の客体的内容の一部ではなく、それに主観的に結び付けられた別の事態を表している。つまり、主節の客体的内容の“外側”にある。従って、(15b)～(22b) にあるように、主節に対する焦点化を受けることができないのである。そして、これは、以下の例からわかるように、理由の since 節以外の主観的副詞節についても同様である。

- (27) a. *It is unless it rains that we will go on a picnic.
 b. *It is while she resembles her mother that her sister resembles her mother. ((a)-(b), Nakajima (1982: 361))
 c. *It is though he is rich that he is unhappy.
- (28) a. *They will not go on a picnic unless it rains but unless they have a storm.

- b. *She did not do well in math while she did fairly well in English but while she was excellent in history.
 - c. *He is not unhappy though he is rich but though his wife is beautiful.
- (29) a. *Will they go on a picnic unless it rains or unless they have a storm?
- b. *Did she do well in math while she did poorly in English or while she did poorly in history?
 - c. *Is he unhappy though he is rich or though his wife is beautiful?

ここまで、because と since の表す関係を、それぞれ「客体的」「主観的」というふうと呼んで区別してきた。だが、因果関係認識の成立過程をよく考えてみるならば、実は両者はコインの裏表のような関係にあるということがわかる。二つの事態の間に因果関係があって、それを対象そのものに内在するものとして概念化すれば because の関係になり、それを話し手が主観的に認定するという面で概念化すれば since の関係になるということである。因果関係というのは、客体的・主観的という二つの認知領域に跨り得るという特殊性を孕んだ関係なのである。⁵ このことは時間・場所（典型的な客体的関係）や譲歩・対照（典型的な主観的關係）と比べてみるとよくわかる。時間関係や場所関係は、話し手の主観から独立して対象そのものの中に内在するというふうイメージしやすい関係である。（但し、once や now that のように、時間と条件・理由を組み合わせて主観的關係を構成している接続詞もあるという点には注意が

⁵ 因みに、because と since のように、因果関係を客体的なもの主観的のもの二様に表現する副詞的接続詞は他の言語でも見られる。例えば、日本語のカラとノデ、フランス語の parce que と comme、スペイン語の porque と como、ドイツ語の weil と da などである。そして、そのいずれにおいても、文の焦点になることができるのは客体的な副詞節のみである。

必要であるが。) それに対して、譲歩関係や対照関係は、二つの事柄の間にあるつながりを人間の側で判断することによって成立する関係概念であり、本質的に主観的判断を抜きにしては成立し得ない関係認識である。これらに因果関係の場合のような二面性がないことは、because と since のような客体的と主観的の二領域に分かれる類義語が存在しないことを見ても明らかである。⁶

ただ、because に関しては一つだけ注意しておくことがある。because 節がイントネーションやコンマで主節から区切られて使用されるケースである。

- (30) a. Anna loves Victor because he reminds her of her first love.
b. Anna loves Victor, because he reminds her of her first love.

((a)-(b), Sweetser (1990: 83))

Sweetser (1990: 83) は、(30a) のように because 節までがひとまとまりで発音される場合には、その因果関係自体 (Anna が Victor を愛しているのは何故かを表す部分) が文の主張の中心をなしているのに対して、(30b) のように区切られて発音された場合には、主節の内容が主張された上で、更に because 節の内容も主張されている、と述べている。この事実は、本稿の立場から言えば、区切りなし because 節は客体的修飾部をなすのに対して、区切られた because 節は主観的修飾部になっているというふうに解釈することができる。つまり、主節の事態の周辺情報を具現化するのではなく、主節の事態とは独立に別の事態を思い浮かべ、それを主節に (主観的操作で) 繋げるということである。この場合、since を用いるのと実質的に同じ修飾構造になっていると考えてよいであろう。そもそも、因果関係自体は客体的なものとしても

⁶ 但し、あらためて言うまでもないが、同じ接続詞が多義的に二領域に分かれて用いられることはある。(i) の since は時間と理由、(ii) の while は時間と対照。)

- (i) a. I have been relaxing *since the children went away on vacation.*
b. He took his coat, *since it was raining.*
(ii) a. He looked after my dog *while I was on vacation.*
b. My brother lives in Manchester, *while my sister lives in Glasgow.*

((i)-(ii), Quirk *et al.* (1985: 1070))

主観的なものとしても概念化することができるのであるから、because の用法の中にこのような二面性が現れてきたとしても何らおかしいことではない。(以上に関しては、Sweetser (1990: 82-86) の議論を参照のこと。)

因果関係と同様に客体的・主観的の両方に跨る性質を持つ関係概念が、実はもう一つある。条件関係である。しかも、英語では if 節自体がその両者に跨る面を持っているのである。というのも、if 節は、通常は否定や疑問の焦点にはならないという意味で、基本的には主観的副詞節であるが、

- (31) a. *We will not go on a picnic if it is cloudy but if it is perfectly sunny.
b. *Will they go on a picnic if it is cloudy or if it is perfectly sunny?

その一方で、only で強められ、条件の絞り込みを表す場合には分裂文の焦点になることができるという面では、客体的な性質も持っているのである。

- (32) a. **It is** only if humans are in direct and very intensive contact with poultry **that** there is any risk involved.
(http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/4881850.stm)
b. **It is** only if a school has not followed its published admissions policy, **that** a parent can appeal with some hope of success.
(http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/education/7275758.stm)

また、同様に“絞り込まれた条件”を表す場合には疑似分裂文に近い以下のような構文の焦点になることもできる。

- (33) a. **The only time** that pond owners should intervene **is** if they own fish, or the bottom of their ponds are full of silt and dead leaves.
(http://news.bbc.co.uk/earth/hi/earth_news/newsid_8451000/8451711.stm)

- b. **The only exception** to the rule of going through security as fast as you can **is** if you have plenty of time and intend to eat.
(<http://www.bbc.co.uk/dna/h2g2/A1132426>)
- c. **The only way** that it could happen **is** if the ship were in extreme weather and positioned sideways to a 70- to 100-foot wave that would have the potential of rolling it over ...
(<http://edition.cnn.com/2010/TRAVEL/03/05/cruise.ship.safety/index.html>)
- d. For months now, party strategists have believed that **Gordon Brown's best chance** of holding on to power **is** if the election is held in an atmosphere which feels more like 1944 than 1945 ...
(http://www.bbc.co.uk/blogs/nickrobinson/2010/03/brown_presents_himself_as_a.html)

更に、否定倒置 (only 倒置) の焦点位置に現れることもできるのである。

- (34) a. **Only** if he had moved right away from the people and their town **would he have** seen something familiar in the lie of the land, the flow of the Avon, and his own tiny hamlet of Brownsover.
(LOB Corpus: F28 130-133)
- b. **Only** if the Exchequer were made the sole source of party funds, which no one suggests, **could parties be** made absolutely independent financially of such pressure groups.
(LOB Corpus: J41 194-196)

以上の事実からするならば、if 節が表す修飾関係の中に主観的なものから客体的なものまで幅があると考えらるべきであろう。つまり、条件関係もまた、対象の中に存在するという面と、それを話し手が主観的に捉えて認定するという面を持ち合わせているということである。ただ、因果関係の場合には、それが

because と since の語彙的分業によって表現されているのに対して、if の場合には、その用法の中に両面が包摂されているのである。⁷

7. 態度修飾部 AM をなす副詞節

客体的修飾部と主観的修飾部の接続詞は、その修飾先を態度層に切り替えることにより、事態認識と発話態度のあり方を修飾する接続詞として機能することができる。このような働きをする副詞節を態度副詞節と呼んでおこう。

- (35) a. REASON: because, since
b. CONDITION: if, in case
c. CONCESSION: though, although

- (36) a. I have nothing in my bank account, *because I checked this morning*.
b. What does the word mean, *since you're so clever?*.
c. We can do with some more butter, *if you're in the kitchen*.
d. He deserves the promotion, *though it's not my place to say so*.

((36), Quirk *et. al* (1985: 1072))

態度副詞節については、一般的には、上に挙げているような、発話態度を修飾する用法が知られている。だが、事態認識のあり方に関わるような用法も存在する。そのような事実を、内容領域 (content domain)、認識領域 (epistemic domain)、発話領域 (speech-act domain) という3つの意味領域に関わる接続詞の体系的多義性の問題として取り上げたのが Sweetser (1990) である。⁸

⁷ 理由・条件関係の表現には、他に、動詞の分詞形から派生した接続表現を用いるもの (considering, given, granted, granting, provided, providing, seeing, supposing, assuming) もあるが、統語的な振舞い方から見て、これらは基本的に主観的修飾部を構成するものと考えられる。

⁸ Sweetser (1990) はここに挙げた副詞的接続詞のほかに、so (等位接続詞), therefore (接続副詞), despite (前置詞) についても同様の多義的用法の存在を指摘しているが、紙面の都合上ここでは副詞的接続詞に話を限定しておく。

- (37) a. John came back because he loved her. (content domain)
 b. John loved her, because he came back. (epistemic domain)
 c. What are you doing tonight, because there's a good movie on.
 (speech-act domain) ((a)-(b), Sweetser (1990: 77))

例えば、(37a) の because 節は、John が戻ってきた理由を表しているが、(37b) の because 節は、John が彼女を愛していた理由ではなく、そのように話し手が判断した理由を述べている。そして、(37c) の because 節は発問の内容の理由ではなく、話し手が発問をする理由を述べている。これらが、本稿で言うところの文の意味の三層構造（事態描写・事態認識・発話態度）をそれぞれ修飾先とするものであることはあらためて言うまでもないであろう。本稿のように、文の意味の主観性領域の階層構造を理論的に前提とすれば、同じ接続詞にこのような用法が多義的に存在することも至極当然のこととして説明することができるのである。

態度副詞節は、たとえ because 節であっても、主節の客体的内容の“外側”にあるので、当然のことながら、文の焦点になることはできない。この点は前節で見た主観的副詞節と同様である。

- (38) a. *It is because I checked this morning that I have nothing in my bank account.
 b. *I have nothing in my bank account, not because I checked this morning but because my wife told me so.
 c. *Why don't you have anything in your bank account? Because I checked this morning.

また、客体的副詞節の because と態度副詞節の because は修飾先が異なるので、両者を等位接続でつなぐことはできない。（客体的副詞節の because 節どうしであれば問題ない。）

- (39) a. *He likes them *because they are helpful* and *because his wife*

told me so. (Quirk *et. al* (1985: 1073))

- b. People call us because they are dissatisfied with what they are getting from the governmental programs and because we are easy to access and there is no bureaucracy.

(<http://transcripts.cnn.com/TRANSCRIPTS/0905/23/cnr.06.html>)

Quirk *et al.* (1985) が主観的副詞節と態度副詞節をまとめて離接部 (disjunct) と呼んだ根拠は正にここにあるのである。

因みに、Sweetser (1990: 82) は、*since* と *because* を比較して、前者が認識領域・発話領域 (= 主観性領域) を表す強い傾向性を持っていると、以下のように述べているが、

Although Eng. *because* is triply polysemous, we may note that *since* already has a strong tendency towards an epistemic or speech-act reading, rather than a content-conjunction reading.

これは、*since* がそもそも本稿で言う主観的修飾部をなす接続詞 (それに対して *because* は客体的接続詞) であり、Sweetser (1990) の言う内容領域を表す場合であっても主観的な性格を持っているということを考えれば当然のことであると言える。

また、態度修飾副詞節によく似た副詞節としてメタ言語的条件節 (metalinguistic conditional) というものがある、という事実も銘記しておくべきであろう。

- (40) a. He has an idea, a hypothesis, *if you will*, that you may find interesting.

- b. You ought to seize this opportunity, *if I may so put it*, with more grace than you are showing.

((a)-(b), Quirk *et. al* (1985: 618))

(41) a. Grandma is "feeling lousy," if you'll allow me to put it that way.

b. John *managed* to solve the problem, if that was at all difficult.

((a)-(b), Sweetser (1990: 140))

これらは、文全体の内容ではなく、文の中の一部に関して、その言葉遣いに関する話し手のコメント（多くの場合、ためらいの気持ち）をつけるものである。例えば、(40a) では、彼の持つ idea を hypothesis と言い直しているが、その後の if you will は「もし hypothesis という言葉でそれを表してよければそう呼ぶのだが」という、その言葉遣いに対する話者のためらいの気持ちを表している。我々が、ある内容を言葉にする場合には、その内容をその語句の表す概念で把握して表現するという過程が存在する。それを通常「概念化」(conceptualization) と呼ぶのだが、メタ言語的条件節は、その概念化の仕方（カテゴリー判断：主観的認識過程の一種）に「そう言ってよければ」という条件をつけることで表現留保 (hedging) の機能を果たしているのである。⁹ 節や名詞句のレベルだけではなく語句のレベルで主観性領域が存在するということは、古賀（2004）で提唱した三層構造仮説の正に主張するところであり、本稿でもその枠組みを前提にしているので、このような現象が存在することは、本稿の立場を支持するものであると言えるだろう。

8. 副詞節の前置について

前にも触れたように、補部以外の副詞節（客体的副詞節・主観的副詞節・態度副詞節）は文頭へ前置することが可能である。

⁹ 類似の現象に Horn (1985) の言うメタ言語的否定 (metalinguistic negation) というのがある。

(i) She is not happy; she is sad.

(ii) She is not happy; she is ecstatic.

(i) のように文の客体的内容を否定するのではなく、(ii) のように文の中の特定の言葉遣いを否定するというものである。

- (42) a. Mary came back when Tom was taking a bath.
b. When Tom was taking a bath, Mary came back.
- (43) a. John went to school though he had a little fever.
b. Though he had a little fever, John went to school.
- (44) a. *Since you want to know*, I saw him with your sister.

(Quirk *et. al* (1985: 616))

- b. I saw him with your sister, *since you want to know*.

(Quirk *et. al* (1985: 617))

そこで問題になるのは、同じ副詞句が前置された場合と後置された場合で意味構造上に違いがあるのか、また、あるとすればそれはどのようなものか、ということである。本稿では、このような文頭前置を「前置き」(Preamble) という概念で捉えたいと思う。¹⁰

前置きとは、発話態度修飾表現の一種で、主節の内容を標的 (target) とする伝達上の参照点 (reference point) となる部分のことである。つまり、文で伝える情報を参照点構造に従って配置し、文のメインとなる内容を提示する前に、聞き手がそれにアクセスするのに手助けとなる情報を提示するということである。(参照点構造の詳細については Langacker (1991; 1993) などを参照のこと。) 前置の場合と後置の場合では、聞き手への情報提示の仕方を変えているだけであるから、文全体の客体描写の内容の違いは全く生じない。このことは、上の a と b の文を比べてみればわかることである。また、前置き部分は主節の情報への参照点であり、概念構造上は発話態度を修飾する形になっているので、客体的副詞節の場合であっても文の焦点にはならない。

- (45) a. "When did Mary come back?" "She did when I was watching TV."

¹⁰ Langacker (2009: Ch. 8) では Anchor という概念が用いられているが、本稿の「前置き」との異同については、紙面の都合上、議論を省略する。

- b. ?? "When did Mary come back?" "When I was watching TV, she did."

主観的副詞節や態度修飾副詞節は、そもそも後置されていても文焦点にならないのであるから、前置された場合は言わずもがなである。¹¹

客体的副詞節・主観的副詞節・態度副詞節が前置き化されやすいのは、それぞれ事態描写の周辺の情報・関連情報・主観性領域情報を表す部分であり、伝達の最重要部（つまり主節）に対する情動的参照点として機能させることが容易だからである。これに対して、補部は前置き化されにくい。

- (46) a. John behaved as if he were a beggar.

- b. ??As if he were a beggar, John behaved.

- (47) a. John looked as if he was hiding something.

- b. *As if he was hiding something, John looked.

まずもって補部は述語と一緒にあって事態描写の中核部を形成する要素であり、英語では統語的にひとまとまりの形で表現されるのが自然である。もちろん、それでも、補部をなす要素が前置き化されることがないわけではない。主題化 (topicalization) として知られる現象である。¹²

- (48) a. Most of these problems a computer could take in its stride.

¹¹ この点で興味深いのは、フランス語・スペイン語・イタリア語などのロマンス系言語である。これらの言語は、基本的な統語配列において焦点部後置 (end focus) の原則に従う。(Lambrecht (1994) を参照。) つまり、逆に言うと、焦点にならない要素は、通常の語順では文頭に前置されるのである。従って、因果関係を表す副詞節のうち主観的なもの (comme, como, siccome) は主節の前に配置されることになる。

(i) Comme il pleuvait, je suis resté chez moi. (フランス語)

"As it was raining, I stayed home."

(ii) Como hacía frío, se quedó en casa. (スペイン語)

"As it was cold, he stayed home."

(iii) Siccome era già tardi, ho preso un taxi. (イタリア語)

"As it was already late, I took a taxi."

¹² 厳密に言うと、英語の文頭前置には、主題を前置する場合と焦点を前置する場合がある。例えば、Gundel (1974) は前者を topic topicalization、後者を focus topicalization と呼んで区別している。また、安藤 (2005, Ch. 36) には前置の多様な諸形態が紹介されている。が、ここでは、紙面の都合上、主題前置のみに話を限定しておく。

- b. This latter topic we have examined in Chapter 3 and need not reconsider. ((a)-(b), Quirk *et. al* (1985: 1377))

主題化の場合は、目的語などの述語の補部（の一部）をわざわざ事態描写への参照点にするわけであるから、前置される要素はそれ相応の談話的卓立性（discourse prominence）を持つものである必要がある。具体的には、定名詞句で表され、その指示対象の存在が、談話の中で既に確立しているか、または既に確立している要素に関連性をもっているか、である。そうでなければ、容認されにくい。

- (49) a. *A problem a computer could take in its stride.

- b. *A topic we have examined in Chapter 3 and need not reconsider.

そして、焦点となる事態描写部も、わざわざ補部の一部を前置き化する、という不自然な操作をするに足るような情報的な重みのあるものでなければならない。ところが、補部副詞節の文頭前置はどうかと言えば、(46)～(47)を見ればわかるように、副詞節自体にかなりの情報量があるので、それを前置き化してしまうと、残った事態描写部分には文焦点としての情報の重みが無くなってしまう。そのために容認性が上がらないのである。

9. 特殊な“副詞節”

これまで見てきた副詞節のほかに、主節の主観性領域を修飾するという点で態度副詞節と共通する定形節構造が存在する。挿入節と付加疑問節である。

- (50) a. The game is over, I think.

- b. This information, we hope, will be useful.

- (51) a. John is studying in his room, isn't he?

- b. Open the door, will you?

これらは、接続詞に導かれていないために一般には副詞節と見なされていない。

だが、その修飾構造から考えるならば、特殊な態度副詞節として扱ってよいのではないかと考えられる。¹³ すなわち、これらが結びついているのは主節の事態認識・発話態度であり、その点で言えば、第7節で見た態度副詞節と基本的に変わるところはないからである。¹⁴ 実際、Quirk *et al.* (1985) は、挿入節・副詞節・独立不定詞・独立分詞構文といった態度表現の諸形式を *comment clauses* として一まとめにしており、

- (52) a. There were no other applicants, *I believe*, for that job.
 b. I'm working the night shift, *as you know*.
 c. *What was more upsetting*, we lost all our luggage.
 d. I'm not sure what to do, *to be honest*.
 e. I doubt, *speaking as a layman*, whether television is the right medium for that story.
 f. *Slated bluntly*, he had no chance of winning.

((a)-(f), Quirk *et al.* (1985: 1112-1113))

また、付加疑問節の変則形として以下のようなものを挙げている。

- (53) a. They forgot to attend the lecture, {am I right/isn't that so}?
 b. They didn't forgot to attend the lecture, {don't you think/wouldn't you say}?
 c. She passed the exam, {right/eh}?

((a)-(c), Quirk *et al.* (1985: 814))

このうち (53b) は明らかに挿入節である。つまり、態度副詞節・挿入節・付

¹³ 古賀 (2006) では、挿入節が主節に対して持つ文法関係については、「主節の文構築の中断」という点を強調するのみで明確な規定をしなかったが、その点はここでははっきりと、態度副詞節の一種であるというふうに修正しておきたいと思う。

¹⁴ 厳密に言うと、挿入節のうち、ここでの議論がそのまま当てはまるのは話者指向型のものについてのみであり、主語指向型については、むしろ直接話法と似た概念構造を設定すべきではないかと考えているが、これに関しては稿をあらためて考察してみたい。話者指向型挿入節と主語指向型挿入節の詳細な違いについては古賀 (2006) を参照のこと。

加疑問節が基本的に共通する修飾構造を持つことを認めているのである。

もちろん統語的分布に関して異なる点もある。それは、態度修飾という点では共通していても、それぞれに特殊性があるからである。態度副詞節は、接続詞に導かれているため、その生起位置に関しては通常の副詞節とほとんど変わらず、文頭・文末・文中への挿入が比較的自由である。それに対して、挿入節は、主節の文構築を中断して、文中または文末へ挿入するという形をとる。¹⁵ 接続詞がないので、文を中断して挿入しているのだということが形式上わかる形になっていなければならないからである。そのため、文頭に配置してしまうと、主節として用いた場合と区別がつかなくなってしまう。

(54) a. *I think, the game is over.

b. I think the game is over.

他方、付加疑問節の方は、主節の発話態度（肯定または否定の主張）を一旦主節で明示した後に、それに反対疑問の形で修正を加えながら聞き手に確認や念押しを求める、という性格を持つものなので、基本的には文末にしか用いられない。

(55) a. *Isn't he, John is studying in his room.

b. *Let's, shall we, go on a picnic.

c. It's true, isn't it, that you're thinking of giving up your job?

((c), Quirk *et al.* (1985: 811))

ただ、(55c) のように、長い文で主語・述語（つまり発話態度明示部分）が一旦登場した後であれば、途中で挿入することも可能なようである。

¹⁵ かつての生成統語論では、挿入節の派生に関して、主節から格下げするやり方と、もともと副詞類の一種として生成するやり方が行なわれた（岡田（1985））が、どちらにしろ、《文構築の中断》という認知操作の特殊性を踏まえておかないと問題が生じることになる。この点に関しては、古賀（2006）を参照のこと。

10. まとめ

本稿では、英語の副詞節の階層的修飾構造を、三層構造仮説を組み込んだ認知文法理論で分析し、補部副詞節・客体的副詞節・主観的副詞節・態度副詞節の4つの分類を提案した。この分類は、Quirk *et al.* (1985) の叙述付加部・文付加部・内容離接部・スタイル離接部という4分類と同じ結果にはなるが、各カテゴリーの客体的または主観的な性格の基盤を明らかにし、具体的な接続詞の意味との繋がりを明らかにしているという点、また、それを認知文法の包括的な枠組の中に位置づけることができたという点で、理論的な前進であると言える。

また、副詞節の振舞いを説明するのに用いた「文焦点」や「前置き」という概念は、従来から様々な形（e.g. 焦点と前提、主題と題述）及び理論的内容で論じられてきたものではあるが、今回、どちらも発話態度を修飾する表現の一種として三層構造仮説の中に位置づけることで、その主観的な性格を認知文法的にうまく捉えることができたのではないかと思う。

本稿では副詞節の全体的分類が主眼であったため詳しく論じることはできなかったが、ここで分類した個々の副詞節は客体性・主観性に関してそれぞれ独自の性格・位置づけを持っている。その一端は、因果関係を表す *because* と *since* の違いや、*if* 節の意味の拡がりという形で触れているが、その他にも、時間性と条件性の親近性、譲歩構文の多様性、譲歩と対照の差異など、扱うべきテーマは数多くある。これらに関しては、本稿で述べた全体的枠組（分類）を踏まえた上での、個々の接続詞の意味分析の問題になるので、今後の課題としておきたい。

参 考 文 献

天野政千代（1976）「分裂文の焦点位置における副詞」『英語学』14, 66-80.

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press, Oxford.
- Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press, New York.
- Ernst, Thomas (1998) "The Scopal Basis of Adverb Licensing," *NELS* 28, 127-142.
- Gundel, Jeanette (1974) *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*. Doctoral Dissertation, University of Texas at Austin.
- Horn, Laurence (1985) "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity," *Language* 61, 121-174.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, Ray (1976) *X-bar Syntax*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- 古賀恵介 (2004) 「意味の三層構造仮説」 『福岡大学人文論叢』 36-1, 107-135.
- 古賀恵介 (2005) 「文とは何か」 『言葉の標 平井昭徳君追悼論文集』 (大津・西岡・松瀬 編) 九州大学出版会 71-84.
- 古賀恵介 (2006) 「挿入節について」 『福岡大学人文論叢』 38-3, 819-854
- 古賀恵介 (2009) 「認知文法における副詞の意味構造」 『福岡大学人文論叢』 41-3, 1095-1123
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Reference*. Cambridge University press, Cambridge.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. II: Descriptive Applications*. Stanford University Press, Stanford, California.
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Mouton de Gruyter, Berlin/New York
- Langacker, Ronald (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Mouton de

Gruyter, Berlin/New York

Nakajima, Heizo (1982) "The V⁴ System and Bounding Category," *Linguistic Analysis* 9, 341-378.

岡田伸夫（1985）『副詞と挿入節』大修館書店

Quirk *et al.* (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.

澤田治美（1993）『視点と主観性——日英語助動詞の分析——』ひつじ書房

Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge University Press, Cambridge.

Taylor, John (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford University Press, Oxford.

安井 稔（1978）『新しい聞き手の文法』大修館書店